

高等女学校の研究（第五報）

——熊本県立第一高女におけるダルトンプラン——

山 本 禮 子

一八九九年の高等女学校令の発布とともに各県一校ずつの設置義務づけの政策の中で、高等女学校の普及拡大は目をみはるものがあった。⁽¹⁾その中心が一九二〇年代である。本論文では、その時代にいわゆる大正自由教育の実践活動としてのダルトン・プランが女子中等教育機関である熊本県立第一高等女学校で実施されたその実態と、教育を受けた卒業生の反応を中心に論述する。なお、卒業生の声は、「高等女学校研究会（責任者山本禮子）」が全国の高等女学校卒業生に実施したアンケートと同時期のものである。

一、学校史にみられる自学自習教育

学校史に記載されている自学自習教育の記事によってこの学習法の流れを辿る。一九一六年、東京府立第一高女では自由研究時間を設置している。⁽²⁾四・五年の割烹及家事実習の時間を二分し、一方を実習、他方を自由時間として各自の不得意学科の学習および女高等進学生徒への準備教育の時間に活用している。当時、大阪府立梅田高女でも自学自習が強調され、⁽³⁾「国語の授業などは教卓を中心にコの字型に机を並べ、デイスカッションが主であった」と述懐する。なお、学年末の一斉考查などを疑問視し中止している。

福岡県立朝倉高女では、⁽⁴⁾一九二三年、自学自習の教育として、各組の教室を各学科教室に変更し、毎日第六時限を自由自学の時間として設定する。「当時ダルトン式教授方式はまだ珍しく、相当注目されたようで、郡内小学校職員に対する講習も行なわれた」と記録されている。⁽⁵⁾「週一回各自得意の教科を選び、日頃あこがれている先生の教室で勉強した」のが新潟県立長岡高女での一九二二年の実践で

ある。

一九三〇年、栃木県立真岡高女⁽⁶⁾は「自学綱領」を制定し、自発的学習態度の養成につとめている。その実施状況はつぎの通りである。

- 1、始業前 生徒は始業三〇分前に登校、クラス担任の指導の下に、その日の授業学科の予習をする。各組とも四、五名を単位として班をつくり、班の中で協力しあつて学習する。

- 2、授業中 できるだけ自発学習をし、特に国語・数学・英語等は辞書類を多数各教室に備える。

- 3、補講の場合 その教科の補充として自学自習、図書室・補導室(自習室)に多数辞書・参考書を用意する。

- 4、第六時限課外 四月より十月まで比較的日の長い間毎週一回一時間あてに行う。この自学の時間、一、二年生は主として正課の予習復習、三、四年生は予習復習の外に、国語・英語・数学及びその他一般学科の四班に分かれ、各自が指導を受けたい学科の先生の許で自由に質問研究ができる。

これらの記録から大正期は自由教育と称しても、ごく初期は自由研究とか討議法の導入で学校の授業体制の中での改革である。つぎの時期が本論文で以下に述べるダルトン・プランの導入で、これは教師の指導体制および生徒の学習計画に全学的な変革をもたらすものである。それ故に、他校に多くのインパクトを与えながら、かえつて実質的普及拡大に到らなかったのではないかと思われる。第三期がその後の学校教育の動きの中で現体制を保持しながら、ダルトンの長所を採用しようとした動きであるとみられる。

二、熊本高女のダルトン・プランの導入

ダルトン・プラン関係を中心とした熊本高女の沿革史(表一)でもわかるように、一九二三(大正一二)年一月から一部で試行、次年度四月から全学年で実施された(第一学年は週一回四時間で数学・歴史について、第二学年は週一回四時間で数学・地理について、第三学年は週二回八時間で国語・数学・歴史・理科について、第四学年は週二回八時間で国語・数学・地理・理科について)。校長吉田惟孝の赴任はそれより二年前の一九二〇年一二月であった。

彼は一八七九年生れ、富山県出身で富山師範を出て小学校に三年余勤務後、広島高師の英語部(第一回生)に進み卒業後、高田師範・池田師範を経て同じ北陸出身の木下竹次校長に招かれ鹿児島女子師範に転勤、翌年から第二高女教諭を兼任する。この間七年間、吉田

第一表 熊本県立第一高等女学校ダルトン・プラン関係沿革史

年	月日／第一高等女関係事項	関連事項
一九二〇 (大正 九)	三・二 吉田惟孝校長の就任式挙行	二〇・四 「帝国教育」 第四六五号に「ダルトン案」という阿部重孝の文章発表
一九二二 (大正 一〇)	三・ 熊本県立第一高等女学校と改称（県立第二高校開校による）	
	四・ 補習科廃止、専攻科配置	
	六・二四 妹尾良彦国語科専任として着任	
	八 吉田校長「ダルトン」方案の学級」と題した原稿を県教育会の「熊本教育」に投稿（熊本県教育会の「熊本教育」へ第一〇四号一〇月号）に記載）	筑波大学所蔵
	九・三 吉田校長外遊の送別会	
	七 吉田校長外遊へ出発（欧米の教育事情観察）	
	九・二六 吉田校長外遊中、校長代理発令	
	二 校友会誌「若草」発刊	
	二 吉田校長の教育観を「学校の教育について卒業生諸姉の了解を求む」と題して、ロンドンにて執筆。（発表は大正一一・一二・二〇発行の「済美」一七号）	
一九二二 (大正 一〇)	五・二七 吉田校長、欧米視察して帰熊	
	八・二七 元 夏期講習会	
	講演 吉田校長 「観て来た欧米の教育」	
	妹尾教頭 「国語教授の革新」	
	兼清教諭 「文化史よりみたる歴史教育」	
	高野教諭 「唱歌教授の理論及び実際」	
	秋、住吉往復十一里遠足行なわる。	
	二〇・二五 『最も新しい自学の試みダルトン式教育の研究』厚生閣より出版	
	二 校友会誌の『若草』（第一一号）に「伸びてゆく」発表。	

一九二三
(大正三)

- 一 「伸びてゆく」(山のわらび)
山のわらび ぐんぐんのびる
春の陽を浴びて ひとりでのびる
田んぼの麦の芽 ぐんぐんのびる
雪の中をわけて ひとりでのびる
- 四 ダルトン・プラン学習開始(第三学年)
ダルトン・プランを全学年に拡大
第一学年週一回四時間 数学・歴史
第二学年 同 数学・地理
第三学年週二回八時間 国語・数学・歴史・理科
第四学年 同 国語・数学・地理・理科

七

吉田校長『指導案例に重きを置いたダルトン式学習
の実際研究』を厚生閣から出版
甲佐往復十三里遠足行なわる。

秋

二

第一回ダルトン・プラン学習公開、全国から参観者
一二〇〇名突破

一九二四
(大正三)

四・三九 ダルトン・プランの創設者ヘレン・パークスト女史
来熊、熊本県・市教育会主催講演会 午後二時半より、
講堂において「ダルトン式教育案について」

五・一 パークスト女史、本校正式訪問、授業参観

六・五 吉田校長『ダルトン式学習の実施経験』を厚生閣より出版

九・二四 九州新聞社主催県下女学校庭球大会に出場、優勝

一〇・五 福岡日日新聞社主催、九州女子庭球大会へ出場、優勝

三二 運動会、絶好の運動日和、観覧者多数

二・二五 第二回ダルトン・プラン学習公開、九州各県より会

する者三〇〇名、生徒の学習参観、生徒の研究発表
校長講話、はるばる来熊の小原国芳先生の講話あり

秋 学芸会 劇「若き城」作者 上野ウタ

八・六 文部大臣、
地方長官会議において、「教育上の新主義」
鼓吹者の監督強化を指示

九・三 学校劇禁止
(文部次官通達)

一〇・三 第一回明治
神宮競技大会開催

二・ 文部省・奈良女子高等師範学校

劇「長崎旅行」作者 山口千恵子 数学教育(村上義)	付属小学校に督学官 を派遣、自由教育の 行き過ぎ是正を指示
三 九州新聞社主催県下女学校音楽大会出場、好評を博す	
三 宇土木原山遠足	
三・三 密柑見遠足	
三 針供養学会 劇「人肉裁判」四年乙組	
三・七 九州日日新聞に「教育方針一変か——熊本第一高女 教諭の異動」なる記事掲載	
四 専攻科廃止、高等科設置	
六 吉田惟孝校長、小樽中学へ転任	
和田廉之助校長着任 三綱領 (一)礼讓節操 (二)自治 自律 (三)進取向上	
この年、テニスの全国大会に優勝	

注： 上記年表は『七十年史』に掲載の年表をもとに「しらうめ」編集委員の岩崎逸子（一―三
 四）氏が、一九八四年三回にわたって改訂したものである。

は木下の薫陶をうけている。一九一七年、三七歳で木下の転出の後をうけて、鹿児島女師、第二高女校長となる。三年後、島根師範校長に転出するが、三年制の専攻科設置にあたり相応の人物を物色していた熊本県は、春まで隣県の女師、第二高女校長をしていた吉田を招くことになる。吉田の熊本県立高女への文部省発令は十一月十八日、しかし、吉田の着任は十二月一日である。当時、女学校は師範学校や中学より下にみられていたので、友人からの忠告がある。吉田は「師範での自由教育には限界があり、思い切った自由教育は、上級学校受験のほとんどない女学校が最もやりやすい。」⁷⁾と書いている。吉田は女子教育に対して、一つの夢をもっていたとみられる。一方、吉田は第一高女赴任の条件として一年間の欧米視察が約束されていた。熊本県では教育の振興は校長の識見に負う所が多いとして、先進の欧米諸国の教育事情を半年乃至一年以内自由に視察させた。このための年間一人当たり六千円の予算を計上していたのである。初年度の一九二〇年は第二師範の鈴木博也校長、吉田は二年目の視察である。なお、この制度は一九二四年迄五ヶ年間続く。こう

して吉田は、二二年七月、欧米の教育事情の視察へと出発、翌二二年五月に帰国する。

吉田はダルトン式学習実施に先立って、校内人事の確立に努力する。それまでの教頭と合わず、この更迭問題が長びく。濟々費、熊中校長の斡旋で私立名門尚綱高女校長に内定、この噂さが広がると卒業生が中心となって留任運動がおこる程である。結果的には吉田の鹿児島校長時代の時呼んだ広島高師卒業の国語科教諭妹尾良彦が着任、吉田の外遊中、校長代理となる。この教頭はそれまで一年半、木下竹次と共に奈良女高師教諭兼訓導であった。つまり、妹尾は木下・吉田の双方の教育学を身につけた人物であり、吉田にとって最適の人材であり、教頭であったといえる。この教頭妹尾は、吉田が欧米視察に出発した後、吉田の指示に従って、秋からダルトンプラン発足の準備を始めた。

第一が人事であった。優秀な教員を集めるために広島高師の後輩や鹿児島関係の教員に依頼し、これらの人々がダルトンプラン実践の中心的役割を担うのである。第二が生徒の意識変革である。厳しい生徒心得からの解放、運動の奨励、読書及び文章を書かせること、さらに年表にもある「伸びてゆく」(山のわらび)を毎日朝会で歌わせた。これは奈良女高師在職中に妹尾が作詞し歌わせていたもので、曲は両校で異なるが歌詞は同一である。

三、ダルトン・プランの実施—個別化—

第一高女で実施したダルトン式学習は、すべての教科で行ったのではない。さきにも指摘したように、一、二年で二教科、週一回午前中四時間、三、四年で四教科、週二回で午前中八時間、当時の女学校で一週間の総時間が二八時間であるから、その中の一四%乃至二八%の実施に当まるのである。表二にあるように四週間分の各科進度の予定を表に書き、実際に学習した状況を記入し、教師の点検をうけている。この進度表は裁縫のようにダルトン式学習をしていない教科にも活用した資料が現存している。⁽⁸⁾

表三、四は数学と理科の指導案の一部である。⁽⁸⁾ 非常に行き届いた詳細な教師の指導の姿勢が窺われるものである。「月始めに各教科の先生からプリントの学習指導案をもらって、学習室で参考書を見ながら、わからない所はその学習室におられる先生に聞いてノートを作りました。その時は学級は解かれ自分の勉強したい部屋に行きました。地歴の学習室は二階の明るい部屋で、参考書はありましたが今の学校のように図書は豊富ではありません。理科の実験は各台にガスがあり、卓上の回転する丸い台に小瓶に入れた塩酸・硫酸・試

表二 ダルトン学習の進度表

高等女学校の研究 (山本)

各科進度表 (自 11 月 3 日 至 11 月 29 日)									
第三學年乙組 (氏名) 柴田 靖									
學科	一		二		三		四		所要時數
	1	2	3	4	5	6	7	8	
國語	1.5	0.5		2	1	4	1	2.5	11.5時
歴史	1.5		0.5	2		4.5		2	12.5時
地理									
數學		2	1.5		1		4	1.5	16.5時
理科			2	2	2.5	2	0.5	1	12.5時
曜日	火	金	火	金	火	金	火	金	(合計) 52.5
時正課時	化学 1.5 数学 1.5 前日 0.5	化学 1.5 国語 1.5 前日 0.5	国語 1.5 数学 2 前日 0.5	理科 2 数学 2 前日 0.5	国語 1.5 数学 2 前日 0.5	数学 4 理科 2 前日 0.5	数学 4 理科 1 前日 0.5	数学 3 理科 2 前日 0.5	
割放課時	理 1.5 国 2.5	前日 0.5 国 1.5	国 1.5 理 0.5	理 2.5 数学 1.5	理 0.5 数学 1.5		数学 1.5 理 1.5	国 2 理 1.5	

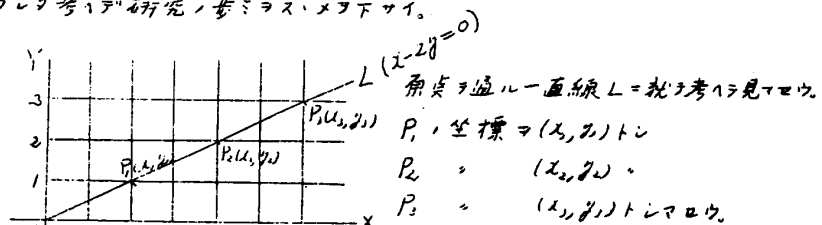
表三 ダルトン学習の数学指導案

第三學年 數學科指導案 (No. 1)

私達ハ丁度去年ノ今頃代數デ比例式ヲ取扱ツテサマシテセウ。
初メテ恒等式ト云フモノヲ研究シ出シテノモアノ頃デゴザイマンデセウ。
証明問題ニナマカレ、苦シマカレテ、デモドウニカモラ思ヒ出シテ興味ヲ
モツテサハアル程ニアツタモノデゴザイマンデ。相等シテ上ヒテ名トオイサスル
証明ノ方法ハワスレヌルヲ標ク殊ニテアリセウ。

拘テ私達ハコトテ兩比ニ比例ヲ取扱ハネバアラナリマンデ。本ヨリ算術デ取扱
ツタノモ代數デ研究シマシタノモ今又幾何デ通算シヤウトナルモノモ、同
ノ事柄ニスチマセヌ。但私達ハ代數デハ算術デヤツタノヨリモ以上ハツキリ理解
シ得タ事ヲ思ハバ、コトテハヨリ一層上ニ比例ノ諸性質ニ徹シ完全ニ理解シ作
上ゲル程ニ努メマクテハナリマセヌ。

幾何デ兩比ニ比例ハ綜合ニ幾何ニ面積等ノ向ニ成立スル比例ヲデモステル
之等ノ量ノ間ニ比例ハ、相等ノ面積ノ後數ノ比トテ面積ルテモ差支ナシト云フコト
ハ前ニ研究シテ通リデアリマス。ソレデモサカラ代數デ得タ比山ノ定理ハ移シ
テ幾何デモ用ヒラレヌスレ共、私ハコトテ兩比ニ何等ノ重要ナル處理ノ成立ニツイ
テ考察シ眼ヲナゲタイト想フデス。ソレハ幾何學的ノ証明ニヨツテヨリ
一層理解ヲ深クシメテサマシタ考ヘル上ニ、¹⁾「ラウレコソ初メテ動カヌ處理
ノ確立ガ私達ニ合スルカレテアラウコトヲ豫想シ勇氣ツケラレタルデス。
レウレコ考ヘテ研究ノ卷ミヲスメマフサイ。



ソウスレバ $y/x_1 = 1/2, y/x_2 = 2/4, y/x_3 = 3/6$ トナルデセウ。
セウラ推シテ考ヘルト $y/x_1 = y/x_2 = y/x_3$
從ツテ原點ヲ通ル直線ハ一ツノ比例線デアルコトガ判リマセウ。

験管などが並び、割烹服を着た私たちは指導案に書いてある薬品を試験管に入れて実験をしていました。興味がありました。私は地理が好きでしたが、先生は兼清先生でした。指導案の問題を見て地図や図表を書いてノートを作るのが楽しかったです。⁹⁾

指導案と対峙しながら、真剣に学習に取りかかっている姿勢が読みとれる。特に「好きな学科は興がのればどんどん進むし、好きでない学科は幾分おさなりになる」という結果は仕方がないこととした。でも制約をはなれて自由に勉強が出来るということとはとても楽しいこと¹⁰⁾として生徒も評価している。この学習態度が英語・音楽・体育に至るまで見られ、限られたダルトン式学習が他教科の学習に

表四 ダルトン学習の理科指導案

第一學年 理科指導案
 持主
 諸注意 前回同様
 第一週 自十月 日 至十月 日
 第一時 題目 蒸散作用
 準備 凡九箇一、二箇の葉を、おもりを以て重く留め、いかに蒸散しませう
 研究 1. 植物の枝を折つて机上に置けば、時々たつしほれは、何故ぞや。2. 金盃に氷と水をかき、その上を氷と折れれば、何故ぞや。3. 今頃朝早く、草原を見れば、葉の尖きに水滴のあはれ何故ぞや。4. 蒸散作用の所を研究するに、此等の理もあかぬ。5. 植物の根より吸ひたる水は、どうなるぞや。6. 葉の裏には、わがう居ますか、わがうないは、六二頁を見よ。7. 蒸散作用はどうした利益がありまうか。8. 此の蒸散作用の盛衰は、如何なることと関係があるか。
 第二時 題目 蒸散
 前回タルトンの整時教授の残り、と試問をせよ。
 注意 この時間の教授及び試問は、進度表には分量は、時間五分とし、時間五時間とし、二本引くことにせよ。
 第二週 自十月 日 至十月 日
 第二時 題目 第二十九課 茎の形態
 教科書 六七頁
 準備 二十九課に記ある材料は、出来て取り採集しなさい。金と、竹、すに、松、丸、望、筒、所を、讀んで、見よ。草、木、と、木、木、の、別、高、木、澤、木、の、別、な、い、例、科、竹、前、や、竹、同、の、こ、も、實、物、に、つ、き、し、ら、(竹、を、い、ふ、こ、も、)。
 1. 地上茎の種々の形及び例。あ、さ、か、ほ、な、び、ふ、ち、の、茎、を、方、を、實、物、に、つ、き、て、見、左、右、の、茎、を、方、を、研、究、し、な、い、
 2. 地上茎の變態、と、ま、の、形、と、例、(實、物、に、つ、き、て、比、較、研、究、し、な、い、
 3. 地下茎とは、如何なるものか、及び、その、例、に、つ、き、て、
 第三時 題目 第三十課 葉の構造
 此の課は、指導教授をしますから、その種りにして、すべて、植物教室に、此の時間、全部、使、合、と、し、な、い、その、前、一、度、位、は、自、習、し、て、疑、問、を、作、り、置、く、も、可、い、解、が、早、い、で、す、そ、し、て、わ、か、ら、ぬ、所、標、本、等、は、他、の、タ、ン、の、時、間、の、こ、も、研、究、し、な、い、
 顕微鏡の觀察は、各自にせよ。い、(此、時、間、も、進、度、表、に、は、一、時、間、の、名、量、時、間、一、時、間、と、し、
 進、度、表、を、正、確、に、つ、く、こ、し、

まで自律学習をもたらしている。ある生徒は国語の「婦人の教養」と題する文に対して本人が自己の意見の披瀝を原稿用紙に二三四〇字も書いている。⁽⁸⁾ また、各教室および図書室の参考書が足りないため、早朝の登校、遅くまでの居残り、さらに日曜登校まで自主的にされている。自発的学習を促したこの学習法は、生徒にとって実質的な学力増進となり、進学率の上昇、文検合格となって現れる。定期試験はなく「口頭テストをうけ、できなかったら、もう一度勉強してうける、チャンスは何回でもあり」また筆記試験や論文もあり、提出物なども評価の対象となっていた。しかし、生徒は「成績のこと考えたことはありませんでした」とか「全然通知表なし、自分の成績とか順位とか夢にも考えなかった」と述懐している。⁽¹⁰⁾

自主的、自律的な学習態度の形成は、その後の進学した専門学校の中でいかされ、さらに成人してからの彼女達の生き方の支柱としての働きをなしていった。

四、ダルトンにおける集団化

自発的・自律的な学習活動を旨としたダルトン・プランは、一方において学級単位・学年単位、さらに学校全体での活動として活発に展開する。回想録や座談会、ダルトンについて語る講演会などを分析すると、個別に学習したことより、全員で協力して対処した活動の思い出の方が頻度が高い。そして前述した「山のわらび」を折ある毎に合唱している。

また、各自が進度表にもとづいて各教科の学習をする中で、単なる個別学習ではなく、互に励まし合い協力しながら学習を進める。

「相互扶助が中に行き届いていたと思います。長欠の人があれば、夜、こっちが、その方を誘い出して、一軒の友達の家へ行つて、三人寄つて、二人が面積など、その人がしておられないところを教えてあげたりして、グループで固まつてお互いに納得のゆくまで教え合うという」⁽¹⁰⁾ことがなされている。「必ず、自分ひとりで消化しなきゃならんという制約はないので、気の合った友達とその間、自由自在に動き回つて、机の配置も自由でテンデンバラバラ。あなたと勉強しなかったら机を引寄せて、窓際へ持つて行つて、二人でデイスカッションやるの。そんなのは、グループ四、五人でやつても全く構わないし、自分で非常に不得手なものは、ご厄介になり、友達と一緒にやりました」⁽¹⁰⁾典型的なグループ学習が自由に展開するわけである。

学級文集作りが行われ、さかんなときは一週に一回発行される程で週番が原稿を収集し、表紙・中扉も描いて、幅広のリボンで飾り

業者に依頼して製本している。出来上りの厚さが四、五糎になるものも多かったようである。内容は学校劇脚本、随筆、作文、短歌、詩等多岐にわたり、それらの作品を通して生徒相互間の友情をはぐくみ文学への開眼となった。教頭妹尾は、この教育的効果を「無言の相互研究」と評価している。各組の文集の名称と一九二二年度の十一月現在までに文集としてまとめた数とを示す（表五）。

表五 学級別文集名と発行回数

学年	文集名と発行回数	
1	蜂の塔 (21)	桃色の日 (22) クローバー (22)
2	希望の光り (45)	銀鈴 (56) たらちね (32)
3	明星 (73)	白鳩 (18) 若葉 (53)
4	公孫樹 (58)	筍 (24) 椰子樹 (60)

四月から十月までの実質六ヶ月間に少ない組で十八回、多いところは七十三回、平均四十一冊の文集が発行されるという驚くべき成果を挙げたとの記録が残っている、しかし、それらの文集の現物は一冊も現存していない。文集の最後は卒業式の時に焼却したようである。「書いてあるものに悪いことはないけれど、私するわけにはいかないという人情がみんなにありました。みんなのものだから、自分ひとりのものにするとはいけないという、そういう気持で焼き捨てた」⁽¹⁰⁾と懐古している。

このような知的活動と共に体力作りにも新しい企画がとりいれられる。遠行と称し、一九二二年秋に住吉往復十一里強歩訓練を実施し、翌年は甲佐往復十三里にのぼし、その後毎年継続された。遠行の目的地は鉄道沿線が選ばれ自分の体力で歩ける所まで歩き、限界にきたものは随時汽車に乗車することが許可された。「全生徒能力にに応じての体力増進の為に、第一高女独特の遠行が毎年行なわれた。八代、住吉、赤水と秋の風物を賞でるゆとりのある間はよいが、後は機械的に足を動かす、どうにかいつも最後迄頑張った。」「十三里歩き通しましたが家に帰ったら廊下にころがって動けません。翌日学校は平常通り行きましたが足の甲も腫れていました。」⁽¹⁰⁾と語る程の体力消耗をとまなうが、完歩する生徒が多い。第一回住吉遠行は五三二人中八一%の生徒が参加、完歩者四三一人で参加者の八六%

になっている。翌年は二里延ばし十三里としたにもかかわらず完歩者は在籍者の八七・三％と上昇した。

吉田はまた、学校劇を奨励した。「学校劇は、舞台で役者が演ずるのを真似てする演劇ではない。学校劇は学校生活について離れぬものである。」と述べ、学校生活から乖離した学校劇はその生命を失ったものだとして評している。当時の校友会誌『若草』には学校劇の脚本が多くみられるが、すべて学校生活を題材としている。一九二三年十一月の公開授業では、遠行を劇化した「甲佐遠行」と、真理探求への努力を賛えた「幸の園」が上演され、それを見た九州日日新聞の記者は、双方とも観客の喝采を受けたと書いている。文部省次官通達による「学校劇禁止」にも拘らず、吉田は学校教育の一環であるとの信念をもって、学校劇上演を推進した。

さらに、テニスの県大会、全国大会への進出、選手ばかりでなく多くの生徒がテニスに打ち興じるテニス人口の多さ、競技に際して「全校の生徒は放課後残つて、高野先生の指導のもとに統一ある力のこもった応援団が組織され」る程であった。旧教員は「スポーツについては、吉田校長がとても熱心」だったと語る。「放課後はご自分から先に出て、ライン引きをして選手の出てくるのを待つておられること」⁽¹⁰⁾もあつた。また、秋の運動会は終始、生徒の自立的運営に一任し、生徒達は仲間と協力してプログラム立案から練習、当日の進行・運営に当ることに喜びと楽しみを満喫したのである。

五、教師集団の動き

存命中の唯一の旧教員の懷古談から教師達の動きをとらえてみる。

「吉田惟孝校長を中心に、妹尾、兼清、栗原、高野、村上、野村の諸先生を初め、職員的大部分が参加して、新しい教授法に、生徒もろとも熱心に取組みました。生徒は参考書が少ないので早朝から登校し、遅く迄勉強する人も多く、職員も山積したノートの検閲に長時間をかけました。参考書を丸写しの人もあつたようですが、書くことによって覚える人もあつたようです。

生徒達が重いカバンを肩に思い思いの各学科の教室に移動していた姿が今でも残っています。当時は生徒も職員も、学習や運動が楽しくて、優秀な成績を挙げまして、授業参観者が絶えませんでした。

又その頃から創作、発表が盛になり、各教室には文集が山積みされていました。従つて学校劇も盛になり、公会堂での一般公開も幾度か催されて、当時としては画期的な事柄でした。

その頃よく父兄会があつて、ダルトン・プランが問題になっていました。優秀な生徒の父兄が、子供が勉強し過ぎるといつて反対されるのを度々聞きました。併し、始めての試みでもあり、又三年という短い期間で、経費も余り無い時でしたから、後で考えてみると、欠点も相当あつたように思います。又現在のように労働時間のやかましい時代には、できそうにもないと考えています。⁽¹⁰⁾

この短い言葉の中に、教師・生徒が一丸となつて積極的に取り組む姿がにじみ出ている。ダルトン学習の教科担当の教師をはじめ他の教科もこれに類似する進度表を作成しているのでそのチェック、提出物に対しての赤インクでの批評記入、教師の仕事も毎日山積して、今日の八時間労働といった時間内での処理は不可能であつたようである。しかし、生徒は「先生方も生き／＼していられた。どの学科も、一杯思うことを書いたノートに、又一面に赤インクで批評を書いていただく嬉しさ。私共は初めから終りまで成績が何番などということは知らなかったし考えたこともなかった。」と述懐している。さきに表三、四として掲載したダルトン学習の指導案でわかるように、生徒に語りかける口調の文章であり、血の通つたものであつたと言えよう。

さらに旧教員の話によると「教師は毎日のように放課後校長宅に皆が集まり、ダルトン式学習について長時間意見をたたかわしたと、校長はそれを静かに聞いていらしたと、吉田校長の人物の大きさを示すこととして、全校生徒がテニスの試合の応援に行く時、校長は小使さんと二人で残つて留守をする、そうしてまでも皆が競技に直接間接の参加を通して一丸となることを望んでいらした。又、教師研修も積極的に奨励した。例えば、裁縫科・家政科の教師全員を一度に奈良女高師に視察に出張できるように手筈をとり、あとのことはすべて校長が善処していた。⁽¹¹⁾」と語る。全幅の信頼を校長に寄せていたことが話の中から汲みとれた。

教師が誠心誠意教育に打ち込むことができるように対応する校長吉田の人物評は、伊藤整の小説『若き詩人の肖像』に詳細に描き出されている。

六、アンケート調査にみるダルトン・プラン

一九八一年、「高等女学校研究会」では、高等女学校卒業生が高齢化する中であつて、彼女達の高女で受けた教育の実態をとらえ、それがその後の生き様にどうかかわつてきているかをとらえようとしてアンケート調査を実施した。その時、熊本第一高女の卒業生のうち、ダルトン・プランで学習した世代である一九二四、二五、二六年卒の各学年三〇名計九〇名にも同時にアンケートを依頼した。

アンケート実施年月日 一九八一年一月～三月

回収状況 発 送 数 四、七八四

有効回答数 一、六一〇

回 収 率 三三・％

表六 熊本第一高女の回収状況

卒業年次	発 送 数	回 答 数	回 収 率
一九二四	三〇	一五	五〇・〇％
一九二五	三〇	一七	五六・七％
一九二六	三〇	八	二六・七％
合 計	九〇	四〇	四四・四％

アンケートの回収は、全国の高女対象に比し一〇％以上高い値になっている。とくに一九二五年は五六・七％と非常に回収率がよく、また、自由記述の欄の記入も他校に比して詳細である。

数的に単純集計できるものを表示したのが表七、八である。左端が一九二四、五、六年のダルトン時代の結果であり、中央がその時代を除いた、すなわち一九一〇、一五、二〇、三〇、三五、四〇、四五五年に熊本県立第一高女を卒業した人々の結果、右側が他県の第一高女で今回のアンケート調査対象校になった二六校の中で一九二五年卒の者の回答を一括したものである。すなわち、熊本第一高女のダルトン教育の特徴を把握するため、(一)他の時代の同校の卒業生との比較、(二)同時代の他の第一高女生との比較を意図したのである。教科別に表から読み取れる特徴を記す。

修身は担当者が他校、他時代に比し、校長が登場することが少ないこと。実際には教頭、および国語担当の年配の女教師が分担してこの任にあたっている。他校では校長との交流は修身が主であるが、吉田惟孝はこの教科での接触よりはスポーツや学校劇を通して、それも直接的というより背後にまわつての関わりである。それにも拘らず、生徒一人々々に与えた影響は非常に大であった。国語では

表七 授業について（その1）

項 目	熊本第一高女ダルトン時代					その他の時代の 熊本第一高女		他 の 第一高等女学校	
	1924	1925	1926	計	百分率	計	百分率	計	百分率
アンケート回答数	15	17	8	40		56		193	
修身・校長	3	9	3	15	37.50	31	55.36	127	65.80
専科	6	3	1	10	25.00	19	33.93	33	17.10
その他	3	9	2	14	35.00	7	12.50	17	8.81
国語・古文	3	6	1	10	25.00	20	35.71	58	30.05
漢文	3	3		6	15.00	9	16.07	24	12.44
書取	3	8	3	14	35.00	33	58.93	114	59.07
作文	10	15	7	32	80.00	33	58.93	115	59.59
読書	8	15	5	28	70.00	24	42.86	112	58.03
その他	3		1	4	10.00	3	5.36	13	6.74
地歴・暗記	8	11	3	22	55.00	37	66.07	134	69.43
地図	3	5	3	11	27.50	25	44.64	39	20.21
見学	1	4	4	9	22.50	5	8.93	28	14.51
調査	1	4		5	12.50	7	12.50	19	9.84
その他	2			2	5.00			6	3.11
英語・選択						9	16.07	16	8.30
必修	15	17	8	40	100.00	20	35.71	159	82.38
必選						27	48.21	1	0.52
無									
授業受講	15	17	8	40	100.00	49	87.50	156	80.82
未受講						5	8.93	10	5.18
英語・暗唱	6	13	4	23	57.50	31	55.36	108	55.96
歌	2	6	3	11	27.50	13	23.21	28	14.51
劇	3	2		5	12.50	3	5.36	9	4.66
会話	3	5		8	20.00	4	7.14	46	23.83
書取	5	12	4	21	52.50	25	44.64	122	63.21
その他	5			5	12.50	7	12.50	7	3.62
数学・難し	6	8	1	15	37.50	23	41.07	69	35.75
易し	2			2	5.00	4	7.14	25	12.95
面白い	7	10	5	22	55.00	24	42.85	76	39.38
興味無	3	4		7	17.50	5	8.93	28	14.51
その他						3	5.36	9	4.66
理科・講義	10	16	8	34	85.00	43	76.79	140	72.54
実験	11	15	8	34	85.00	33	58.93	133	68.91
観察	8	8	5	21	52.50	35	62.50	80	41.45
採集	5	6	4	15	37.50	29	51.79	35	18.13
標本	4	7	5	16	40.00	20	35.71	28	14.51
飼育		1		1	2.50	4	7.14	12	6.22
その他								2	1.04

表八 授業について (その2)

項 目	熊本第一高女ダルトン時代					その他の時代の 熊本第一高女		他 第一高等女学校	
	1924	1925	1926	計	百分率	計	百分率	計	百分率
音楽・唱歌	11	17	5	33	82.50	42	75.00	151	78.24
合唱	14	15	7	36	90.00	43	76.79	136	70.47
ピアノ		2		2	5.00	3	5.36	19	9.84
バイオリン	2	2		4	10.00	2	3.57	5	2.59
オルガン	5	4		9	22.50	12	21.43	38	19.26
楽器	5	6		11	27.50	18	32.14	13	6.74
楽典		1		1	2.50	15	26.79	59	30.57
その他		1		1	2.50	2	3.57	4	2.07
図画・模写	7	9	3	19	47.50	25	44.64	95	49.22
自由画	4	9	3	16	40.00	33	58.93	56	29.02
静物画	5	4	3	12	30.00	30	53.57	73	37.82
人物画	1	1	2	4	10.00	16	28.57	30	15.54
風景画	5	4	2	11	27.50	30	53.57	67	34.72
写生	15	15	5	35	87.50	49	87.50	99	51.30
彫刻						3	5.36	2	1.36
粘土						4	7.14	3	1.55
版画						5	8.93	4	2.07
体操・ダンス	11	11	6	28	70.00	34	60.71	106	54.92
テニス	7	13	1	21	52.50	11	19.64	97	50.26
バレーボール	3	8	6	17	42.50	25	44.64	70	36.27
卓球	11	13	4	28	70.00	26	46.43	65	33.68
バスケットボール	4	9	5	18	45.00	9	16.07	86	44.56
球技	12	16	5	33	82.50	42	75.00	72	37.31
薙刀	2	2		4	10.00	41	73.21	10	5.18
肋木	7	9	5	21	52.50	19	33.93	87	45.01
平均台	12	12	6	30	75.00	21	37.50	92	47.67
跳箱	12	14	7	33	82.50	20	35.71	99	51.30
器械体操	14		8	22	55.00	30	53.57	55	28.50
陸上競技	1	13	1	15	37.50	15	26.79	50	25.91
水泳		2		2	5.00	7	12.50	9	4.66
家事・衛生	5	8	3	16	40.00	25	44.64	70	36.27
家計簿	2	4	2	8	20.00	20	35.71	45	23.32
洗濯	2	8	2	12	30.00	30	53.37	95	49.22
染色	7	11	6	24	60.00	34	60.71	112	58.03
割烹	13	16	8	37	92.50	50	89.29	163	84.46
栄養	7	4	3	14	35.00	31	55.36	66	34.20
住居	4	3	4	11	27.50	17	30.36	39	20.21
その他	1	1		2	5.00	5	8.93	7	3.63
裁縫・和裁	15	17	8	40	100.00	48	85.71	178	92.23
洋裁	4	4	6	14	35.00	37	66.07	66	34.20
ミシン	7	7	6	19	47.50	43	76.79	99	51.30
手芸	5	3	2	10	27.50	35	62.50	77	39.90
編物		1	1	2	5.00	25	44.64	65	33.68
その他	10	12	5	27	67.50	7	12.50	20	10.36

書取りが他より低く、作文・読書が八割、七割と高率になっている。英語の全員必修、数学が面白いとの反応が五五%と高く、理科では実験が他を引き離して八五%と高い数値を示す。音楽に合唱九〇%に達し、第二の校歌であった「山のわらび」を集会の度毎に歌っていた。写生については熊本第一高女が全時代を通して他校よりよく指導したことがわかる。また、体操のテニス、バスケットはその時代の高女で共通して流行したものであったことが数値から読み取れる。ダンス・平均台・跳箱といった種目にも卒業生の想い出は鮮明である。家事・裁縫の教科でのダルトン学習としての特色はみられないが、他の時期の熊本第一高女の欄の数値と比較検討しながら、家計簿、洗濯・栄養・住居といったより科学的な家事および洋裁・ミシン・手芸・編物の西洋的な衣生活の導入は一九三〇年代以降の女子中学教育内容として大巾に導入されていたことが判明する。

七、自由記述にみるダルトン・プラン

第一に自学自習のダルトン・プランの指導法を肯定する意見が圧倒的に多いことである。自分で時間割を定めて自学自習したこと、公开发表で国語の学習法を発表したこと、数学の教科書は買っただけで先生のプリントを使用、徹底したダルトンプランで幾何のテストは個別の口頭試問でごまかせなかった、入門も論理学の初歩から始まって面白かったことが記述されているが、概して教科の記憶より学習方法そのものが鮮明に残って居て、それが現在でも生きているとの述懐が多い。

「入学当時は普通の厳しい教育でしたが、後半は、自主的な勉強方法の指導になり、図書室には参考書が沢山あって自由にノートを作りまとめて提出し、科目により試験はなくノートが成績になりました。時々まとめの講義がありました。……外部の方もよく授業参観にいらっしやってみて頂きました。」(一九二四年卒)

「一応大まかな講義があり、先生がプリントされた問題を出される。それについて教科書を基本に図書館で参考書を選んで調べたり、友達と話し合ったりして答えをまとめ提出する。それと大体一週間に三日おきに質問を主とした授業がある。」(一九二四年卒)

「ダルトン・プランの教育は学ぶことに興味を覚え学校が楽しくなり、私は日曜も学校へいき図書室で自分がやりたいことを一生懸命やりました。……自分が読んだ本の感想を書いて先生と話しました。職員室の出入は自由で不明な点はいつでも質問して良かったのです。」(一九二五年卒)

先生と生徒の自由な交流、生徒の全力投球の学習態度が、アンケートの行間に溢れているという感じをもつ。

「四年間ダルトン式でしたので自由にのびのびと自分の研究をした。したい学科について広くも深くも出来ました。学期毎に各学科の指導案が配られ、それは最小限のものでしたので、各自学校図書館、県の図書館等で参考材料を得、また個人でも学科主任の指導を仰ぎ、充実したしかも楽しい四年間の学生生活でした。」(一九二五年卒)

「ダルトン・プランなので自分で参考書など選び自分のノートを作った。分からないところを先生に習った。それで職員室は質問する人でいつも一杯だった。」(一九二五年卒)

「一定の期間内に定まったページ数をこなせば時間割は自由に自主的に作って、何時間続けて一課目を学習しても良いというシステムであった。主に数学、国語等数科目位で参考書を相手に解らないところは教師に尋ねるということ、押し付けられることなく、自主的に自由に楽しく学習できたことが印象深く残っている。自分で考えることが身についたと思っている。」(一九二六年卒)

ダルトン式学習は、吉田の小樽中学転任と共に一部を残して中止となる。そのことに触れる卒業生もある。

「ダルトン・プランの完全実施は国語、数学、理科、地歴。他の教科も出来る限りその精神を取り入れてあった。日記は一週間に一回担任に提出、熱心に書くこともあればため書きすることもあった。作文の時間有島氏の『生れ出ずる悩み』を読んで頂いたこと、また先輩の画をみせて一言ずつ感想を述べさせられたことが新鮮な記憶で、作文の添削は殆どなかった。……ダルトン・プランは校長先生を始め熱心だった諸先生の御転任と共に全く突然中止になった。子供心に政治的なものをかきとり、大人に対する一寸した不信の念を持ち、学校生活が色あせた。つまり四年生になって学校生活がつまらなくなったが、幸い私は上級学校の入試準備を一人でコツコツと始めたので、学校の授業は内職となった。」(一九二六年卒)

学習意欲を刺激したのは、個々のペースで実施する自学自習にのみあったのではなく、友人同志の協力、良い意味での競争が大きな役割を担っている。

「一生懸命に他人より多くの勉強のデータを作り早く目的まで達し余裕の時間を作りたいと励みました。皆で話しながら考えたり調べたりでとても楽しい時間でした。時間のくるのも忘れるほどでした。」(一九二四年卒)

「作文、和歌等それぞれ自由に書いて持ち寄り一つの文集として綴じ、回し読みをしました。」「国語、数学、理科、歴史、地理の科

目の自学自習をしましたので、親しい友達で勉学のグループが出来て、放課後もまた家が近い友達とお互いの家で十時近くまでノートの整理やら解らないところは助けあつて勉強しました。」（一九二五年卒）

相互学習、共同学習は教科の学習だけでなく、前述したように文集製作、合唱、運動会、遠行等の中でも活用されていく。しかし、このダルトン学習を礼賛する中で、辛い思い出を綴る人もある。

「自学自習に卒業まで子供でしたため、大人入り出来ないまま幼なかつた自分が情けない思い出ばかりです。」（一九二四年卒）

「女学校時代の思い出としては強く残っているが、上位の人にはよいが勉強嫌いの者にはマイナス面が多かつたと思う。」（一九二六年卒）

わずか二名とは言え、この評価も教育現場では貴重の声として反映させねばならない。何時でも何処でも集団に自分から入っていない子ども、積極的に行動をおこす術を知らずに戸惑っている子どもに援助し、手を差し伸べることを教師は特に心に留める必要がある。しかし、実際にはダルトン学習を進捗させるための準備、指導に終始せざるをえないほど、教師も多忙であつたであろうことは推測されるところである。中には「個性が出すぎて女らしくなくなつた様でした」と感想をもらす人もある。この評価は、父兄はじめ第三者が当時少なからず抱いた感想である。

ダルトン式学習法で教育を受けた生徒達が、「高等女学校の教育について」どのような感想をもっているのかを一覧してみよう。

「少し自惚れかも知れませんが普通以上の教育を受けたことは、特にダルトン・プランのおかげで自信らしきものを持ち積極的に心豊かな人生を送れると自負しております。」（一九二四年卒）

「何事も自分で自由に工夫し、努力する。又なんでも人に聞くことを恥としないダルトン教育の精神が暮しの中に生かされたと思う。終戦直後夫がなくなつてから、生活の問題、人間関係など色々あつたが、自分の力で切り抜けることができて、子供はまだ幼かつたけれど、明るく伸び伸び育てることができました。」（一九二四年卒）

「実に恵まれた学校生活で自由で楽しい思いをしたことを誇りに思っています。積極的な性格もこの時代にできたものと思いますし、自尊心もこの時代の教育のおかげであると感じています。」（一九二四年卒）

「たつた二年間のダルトン・プランの教育が、自主性を育ててくれた。自分の目でものを見、自分の頭で考えたことしか信じない。

そして困難に立ち向う勇気を与えてくれた。その裏返しとして多少わがままで、かなり常識不足の面がある。上級学校に入学して最初の一年は何も知らない自分にうんざりしたが如何にして一人で学ぶかの方法を多少経験していたので、二年になった頃は楽になって時間にゆとりも出来て、読書その他生活をエンジョイ出来た。」(一九二六年卒)

「とにかく物事について基本的なことが解るようになったことがよかつたと思う。殊にダルトンプランの教育を受け、自主的に積極的に事を運ぶということを学べたと思う。」(一九二六年卒)

多くの卒業生にとってダルトン式学習法がその後の生き方、物の考え方の基本になったことは良きにつけあしきにつけ否めない事実である。ある卒業生はつぎのように付記している。

「ダルトン・プランについての感想は私一人のものではありません。卒業六〇周年のクラス会を昨秋開きましたが、大部分の級友が表現こそちがえ同じことを考えていました。しかしこの教育は容易に出来るものではありません。当時の校長、吉田惟孝先生はじめ諸先生の長い準備期間と大変な労力と教師の生命をかけてのお仕事だったのです。」(一九二六年卒)

この記述から、ダルトン・プランによる学習指導法が生徒に強い影響を与えたことは事実であるが、それと共に校長のリーダーシップ性、それを支える首脳教師陣、さらに教師全員の一致した教育への情熱的姿勢、これなくして教育の成果は期待できないことを痛感する。

八 結語—ダルトン・プランの終焉—

すでにダルトン・プランの効用については『しらうめ』掲載の回顧談、回顧録およびアンケートによって指摘してきた。何にもまして「ダルトン・プランを実施された吉田校長の自由と愛とに一貫した教育理念が、今改めて私の心の中によみがえって来る」と披瀝する程、彼女達の「生涯に大きなウェイトを占め、自己の通過点であり、出発点」になったのである。「日本一のいい学校に学んでいるという自信と誇り、私達の先生程すばらしい方達はいられないという親愛と信頼感」「自分の手で物を創る喜び」とくに「三年生当時のクラス劇『幸の園』で、台本、歌詞曲づけ、振付すべて生徒の力でやり、協力の意味」を体全体で感得しているの。「吉田校長のダルトン教育研究は、その実際において、徹底せずば止まない貫徹性を帯びた」ものであり、学校全体の盛り上りになっていたのである。

一九二四年四月二九日、ダルトン・プラン創設者ヘレン・パークスト女史が来熊し、熊本県・市教育会主催で「ダルトン式教育案について」と題する講演会、五月一日に熊本県立第一高女を女史が正式訪問し、ダルトン式学習による授業を参観している。秋には第二回のダルトン・プラン学習公開が実施、九州各県より三〇〇名の参会者を迎え、ますます軌道に乗って運営されて行くように見えたその頃に、文部大臣は地方長官会議において「教育上の新主義」鼓吹者の監督強化を指示したのである。さらに一月には文部省が奈良女子高等師範学校附属小学校に監督官を派遣し、自由教育の行き過ぎ是正を指示している。こうした動勢の中で、一九二五年四月、吉田は小樽中学校長として転勤する。三月七日の九州日日新聞に「教育方針一変か―熊本一高女教諭の異動」の記事が掲載される。「熊本県立第一高等女学校職員中重立つ人々に異動あるべしとは夙に噂されてゐたが……」との書き出して、音楽担任高野教諭は家事の都合、兼清教諭が同時に依願免官となり京都大学に進学、教頭妹尾教諭は嚴父の長逝が因となり退職になるかも知れずと報ずる。「現校長吉田惟孝氏赴任後に他から来任した多数の職員に交迭がある」とすれば同校が取り来った近年の教育方針亦従って変動を免かれぬ事情に在りはせぬかといふ。」そして現に、吉田が三月三一日付で妹尾良彦は四月二七日付で、野村ユウ、村上茂之は三月三一日付で退職している。一九二一年から二三年のダルトン時代に来任した八名中六名（この年間にあきらかに後任として来たものは一名と数える）が二五年の三月から四月にかけて転任あるいは退任したことになる。

一九二八年発行の『済美二六号』に吉田は「小樽から」と題して一文を寄せている。

「謹んで創立二十五周年をお祝い致します。……私の本校に関係したのは大正九年十二月始めから十四年四月始め迄で、四年四ヶ月の短日月であつた。二十五周年の約六分の一に過ぎない。本学の発展のために何一つ出来なかつたことを遺憾に思つて居る。……一意専心内部の教育の革新に希望の光を求めた。斯くしてダルトン案の精神と方法―責任感と自発活動―を我が国の事情―国体と国民性―に適合せしめ一は以て我が国婦人の短所を矯正し、一は以て長所を延ばし、眞に世界的日本の負担の一半に堪え得る婦人の養成に努力して、奉公の一端を尽さうと念願した。此の革新の企は三十年の私の教員生活中最も経験を与へて呉れたが、伝統精神の濃厚な熊本の地に於て、日の浅い信任の薄い私には無理な企であると感じ、所期の第二段までの計画を果して北海道に來た。新開地又は之に近い土地は私に適してゐるらしい。……（略）」

九州日日新聞の記事と吉田のこの文章からみて、強制的に辞職、転任を要求されたのではないが、諸般の事情を勘案し、さらに国の

政策動向とも考え合せて、新転地小樽へと旅立ったのであろう。同僚の誰をも同行せず赴任したということは、熊本で実施したダルトン・プランとの訣別をも意味する。小樽中学でも、さらに転動した福井の中学でも校長として手腕を発揮している。ちなみにその中学校の学校史の吉田のプロフィールの一部をみてみよう。「……本校に着任するや学校経営に敏腕をふるい種々の教育上の改革を断行した。机下駄箱に於ける成績の序列の撤廃、教師と生徒の会食、進学課外授業、ラジオ体操、乾布摩擦の実施等校挙に違がない。生徒各人の生活環境についても刻明に調査し、各家庭を訪問した。……」学校や地域社会の様子をみながら必要だと思われる教育方法を独創的に構案し、実施したといえる。

この偉大なる校長吉田の後任人事について県も大いに意を用いたと思われる。福岡女子専門学校教授であり、九万里という号をもつ俳人和田廉之助、文化人的一面を持った人材を校長として迎える。一九二五年着任直後、つぎのような三綱領を掲げた。

- 1、礼讓節操 2、自治自立 3、進取向上

この項目からも吉田の精神の否定者ではないことが窺われる。吉田・妹尾が去った後も「山のわらび」は歌われ、文集づくりも継続する。さらに遠行は戦争が苛烈になり、学校行事が中止になるまで続けられたのである。⁽¹⁰⁾

「思ひ出づるそのかみのダルトン戦、教育戦の第一線に立つて奮闘をつづけた阿蘇山下の四年間、肥の国の火の如き少女の意気に、無限の力を感じ乍ら、わが人生の戦を続けたものでした」⁽¹⁵⁾と妹尾をして語らしめたダルトン式学習は一応終止符は打つが、教育を受けた生徒の中に生き続け、様々な試練・障害の中でその偉力を発揮し、点火された炎は燃えつづけ、さらに次の世代へと引き継がれていく。

一九二五年三月一八日、第一高女の卒業式の答辞はこのことを立証しているといえよう。⁽¹⁶⁾

「答 辞

光輝ある首途の日

夢の様に過ぎた四年間の温いむつみを今更になつかしく想出します 然し今きられようとするあざやかな白線の上に凜々しくも雄々しく身構へた新しい戦人が燃ゆる意気と信念に輝いてゐます。

そのひき締った眉宇には希望と抱負の深いかげが大きく動いてゐます。そして世の所謂恐しさも苦しさも悲しさもそれ等の前に唯却

て向上への好試練の地としてのみ展けるので御座います。然もその向ふ最も正しく勇敢な所には暗雲も遂にはれることを疑いません又よし正義をかざしてなほ破れる事があつても決して邪惡の勝つ世界は信じますまい。

ひたすら鷹揚に落ついた足ぶみを固く台地につけて進むことを忘れまいと覚悟して居ます。……略」

自発的、自律的人間への変革を求めた高等女学校における自由教育は、個と集団の止揚しあう教育実践を展開し、生徒の中に内実化していった。教育とは、一人が去りあるいは死去しても、播いた種は次の世代へと受け継がれていく。そこに望みがあり、また進歩がある。

注

- (1) 西村絢子、新井淑子、館かおる「高等女学校の研究——設立過程を中心に——」『お茶の水女子大学女性文化資料館報第五号』一九八四
九一—一一一頁
- (2) 東京都立白鷗高校『創立七十周年記念誌』一九五九 六四頁
- (3) 大阪府立大手前高校『七十年史』一九五八 二三七頁
- (4) 福岡県立朝倉高校『創立五十年史』一九五九 二八七頁
- (5) 新潟県立長岡大手高校『八十年のあゆみ』一九八二 四九頁
- (6) 栃木県立真岡女子高校『七十年誌』一九八一 一二五—六頁
- (7) 熊本県立第一高女同窓会誌「済美十五号」一九二〇
- (8) 熊本県立第一高校内清香会館ダルトン資料室に保管
- (9) 熊本県立第一高校清香会八十周年記念特集号『しらうめ』一九八三 七九頁
- (10) 同『しらうめ』一九八三 五五頁—七三頁
- (11) 旧教員陣内キイ先生を一九八一年三月に筆者が訪問しインタビューをする。ちなみに陣内先生は筆者の熊本県立第一高等女学校時代の恩師であり、二年から五年までの担任であった。
- (12) 高等女学校卒業生に対するアンケート調査結果は左記の冊子にまとめた。

『高等女学校卒業生に対するアンケート調査資料No.1』 一九八五

『同 No.2自由記述』 一九八八

『同 No.3私立女学校・高等女学校』 一九八八

(13) 大正十年三月七日土曜日九州日日新聞の記事は熊本県立第一高校内清香会館ダルトン資料室に保管

(14) 『福井県立藤島高校百年史』 一四三頁

(15) 妹尾良彦「その後」『済美26号』 一九二八

(16) 九州日日新聞 一九二五年三月一八日

本研究に際し、熊本県立第一高等学校同窓会で、一九八四年度『しらうめ』編集委員であつた岩崎逸子氏に資料提供等全面的に御援助いただいたことを記し感謝の意を表する。